

鈴鹿呂仁
拾掬集 その五十四



大円の鳶の高舞ひ大旦
百年てふ大樹の重み年新た
七癖の一つは隠す女正月
偶作に身ほとりの春うごきだす
恋猫の屋根のソーラー知恵熱とり
佐保姫の予約お一人青丹よし

全きを得て早梅の二三輪
春となり日付を合はす腕時計
祇園・知恩院吟行五句

風花の祇園花街隠れ川
空耳の東風の空かな大鐘楼
三門へ東風を連れ添ふ女坂
大綿の透きとほる空千姫墓
寒木の弥陀に重ねる千手かな
俳句四季三月号
磯巾着待っただけの恋に飽く

—近詠—

鈴鹿 仁



龜鳴く

三門の威を示すなり春の坂
裏がへる世の常なれど龜鳴けり
木戸ゆする風のおもはく余寒かな
余寒なほ婆の吐出す独り言
雪とけて茅葺の家ひかり合ふ

—近詠—

和田 照海



野風呂岬

初夢の安芸伊予統ぶる野風呂岬
辞世の句未だ成らずや若潮汲む
海鳴りや太箸白き米祝
水甕にみづの脹らみ初明り
綿津見の波のともゑや船初

松本 鷹根



塩貝 朱千

花芽付く

水琴窟

青雲に捧ぐ禱りや初御空

おほらかな師碑にまみえむ冬の蝶

花八手多忙は達者門を掃く

楊貴妃の頬ふくよかに寺襖

嵩落葉踏む夕照や自画自讃

ししをどし響く泉山雲疾し

裸木の絹雨並木絵画展

ポインセチア幾百瞳乾きくる

花芽付く梅の古木や朝散歩

冬鳥に水琴窟は母のこゑ

英華採集

一些事に一つの仔細十二月

福山林 すみ

多かれ少なかれ殆どの人が忙しい日々を送る十二月。とは言え、夫婦ともなると一家の主婦の方が雑事を抱え一つづつ熟していく多忙さは夫の比ではないだろう。どんなに小さな事であっても徒や疎かに出来ない事が多いのではないか。「一些事に一つの仔細」とは言い得て妙なる表現である。「十二月」という季語と上手く響き合っていると言える。

木枯し一号倒されていく歯科の椅子

岡山 佐藤 千恵

「歯」という人間の部位は、他のものと比べると些か軽んじられているところがあり、歳を重ねてくるとその大事さに気付く人が多い。歯の治療に行きあの椅子に腰を下ろした人は、覚悟を決め歯医者先生に身を委ねるのである。椅子が倒されていく僅か数秒の時間は、とてつもなく長く感じられるのではないか。「木枯し一号」との取合せにより、身体の隙間に無遠慮に入り込んでくる寒々としたものが、読み手に共感を持たせる。

仮の世にいささか長居浮寝鳥

大津 畑 耕之介

終章だのエンディングノートだのと自分自身のまとめを飾る美しい言葉があるが、掲句の達観した表現に俳味があつて好きである。「いささか長居」には、こんなに長く生きるつもりが無かつたことと、そうは言うものの誰にも迷惑をかけない気楽な自分を許してくれ、と言う風天の寅さんを気取っているような面白さがある。季語の「浮寝鳥」もよく効いている。

初千鳥 藤岡紫水

老杉に闇を返してどんど果つ
大寒に入りても凜と寸の草
寒夕焼男にもあるさびしき日
山を背の浦曲は凪ぎて初千鳥
冬うらら赤むらさきの暁の比叡

一夜雪 丸井巴水

無駄骨はなき鮫鱈の夢ごこち
北風を好みし男西へ向く
雄と雌そつと咳するもう一つ
遠吠の山村つつむ一夜雪
干鱈の断末貌を持って余す

貝 雛 沼田 巴字

春の雷おのれの位置をあやふやに
春の雷身を軽くして丘を越す
一齡をまた重ねけり春の暮
貝雛やおんば日傘の王と姫
嬰眠る臥しどたるべし雪柳

春 隣 植村 蘇星

明日がある事の励まし春隣
加齢てふなりの挑戦春隣
博学に挑む雑学春隣
正宗のやうな切り込み春一番
豊穰を祈り占ふ春の雪

息白し 北川 孝子

生も死もただの一字春あけばの
来世また海道の弟子寒比叡
大根煮る自愛はいつも後廻し
ねんごろにまずはこの身に御慶のぶ
ときめきもあきらめも息白し

流行語 高木 品子

限界に来てゐる手足葱の泥
まだ熱い体中から紅葉降る
鍋の湯気面白くなる流行語
一脚の椅子を喜び柚子搾る
招きあげ昼と夜との人通り

花 柊 直江 裕子

小春日の街をペリカン歩いてる
眠らない冬木にいつそセレナーデ
花柊風の便りさへ消えた
刈りとれぬものなほ光る刈田かな
秋茄子の皮を剥いたら母の青

マニキュアの爪 伊藤 希眸

霜光や織部の皿は掌に溶ける
竜の玉ほろり零れて無言なり
冬もみぢ虚実は風の渦の中
寒星の湖面(こも)に張りつき空ひろげ
マニキュアの爪伸び年の押し詰まる

狐の眼 奥田 筆子

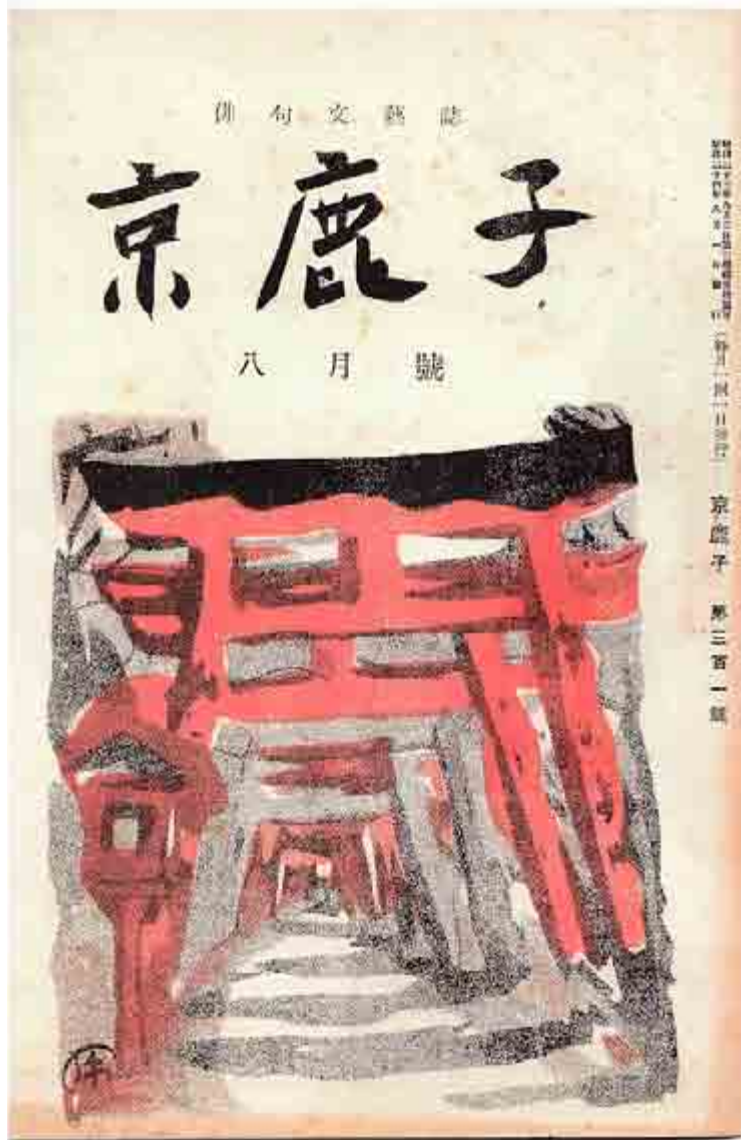
散る時の木の葉狐の眼まなこしましたか
ちよろちよると燃せし手紙にあたたまる
山茶花の混浴かしましき温泉
蓑虫は木の葉のお針子おばあちゃん子
綿虫も人もさりげなく消ゆる

鬼は外 井上菜摘子

鬼は外たれも居なくなつたお家
返り花うつてかはつて無口なり
防犯カメラに幾つのわれや冴返る
少年やあやしきものを焚火して
だからつてポインセチアへ地味になど

母子草 村田あを衣

西行忌花ひとひらの詩ごころ
野に咲けば野に従はむ母子草
春どなり買ひに行かねば花図鑑
行き方は単線思考さへずれり
鳥帰る開けば地図の置手紙



俳句文藝誌

京鹿子

八月號

創刊号(昭和二十二年三月)以来、毎月一冊、毎月一日発行。京鹿子 第三百一號

通巻三百号の画像



京鹿子集

鈴鹿呂仁選

見つからぬ言葉師走の電子辞書

京田 山中志津子

金木犀童話の町へ退院す

天命の野にかくれなき冬の蝶
霜枯や風のうしろの風の私語

城陽 鷺山 珀眉

十三夜我に踏まれて我の影

湖底は比良へつづけり紅葉鮒

隠せざる傷痕残し蛇穴に

銀杏且つ散る終章のシンフォニー

余白無き住宅地図に石路咲かす

小夜更けて遣らずの雨のおでん酒

笑ひ上戸泣き上戸めてもみぢ山

京 都 井尻 妙子

マフラー巻き人の会話の外にゐる

福 山 亀井 福恵

ふり出しに戻れぬ仔細もみぢ烈し

風立ちて翳れば騒ぐ枯はちす

雑木もみぢ十人十色てふ賛辞

極上の風を招きて銀芒

おでん仕込む良きこと一つ舞ひ込むで

雁渡る湖はさざ波日和かな

をんなだつて良いではないかおでん酒

裸木のどの枝先も上を向く

おでん煮る大根役者の域を出す

福知山 西村 白杼

母の翳探してをりぬ冬の蝶

淋しん坊寄つておいでよ花八ツ手

山茶花や風吹くたびに自由人

上様と呼ばれ落さる屋根の雪

ちり紅葉地に還りても己が自負

京 都 菊池 和子

すれ違ふだけの人なり師走来て

おでん大根われは主役と脛を出す

ひとり増えおでんの湯気の丸くなり

うしろより切干日暮ひき寄せ

白鳥の火の鳥となる大夕日

高 槻 安田 優歌

水底の小さき城へと鳩の昼

小白鳥湖の夕日を使ひ切る

年惜しむ三井の晩鐘有為の風

ポインセチア炎ゆ煉瓦館の二灯

確信のもてぬ世木の葉降りやまず

大 阪 本郷 公子

一村の一寺安寧柿落葉

出しそびれし手紙山茶花散りそむる

雪積るけふ特別な日のやうに

小夜更けてお喋り好きのシクラメン



一些事に一つの仔細十二月

福 山 林 すみ

自愛てふことも一つや冬支度

言ひ分の夫々ありてみかんむく

冬構男結びと徒結び

木枯し一号倒されていく齒科の椅子

岡 山 佐藤 千恵

散り山茶花メトロノームに急かされて

テールランプ毛皮に深く頬うづめ

昨晚の答あいまいに冬の霧

仮の世にいささか長居浮寝鳥

大 津 田畑耕之介

大銀杏本気で散ってしまひけり

存念の色憚らず石榴の実

いけ好かん人どす毛皮なんか着て

枯葉踏む隠し事などできぬ世や

アリソナ 伊吹 之博

潜水艦だ！無中の遊び敷紅葉

男木と女木銀杏匂ふ二人杖

門や箒目に落つ檜葉